

出生から月齢6ヶ月頃までの乳児の発育発達および 父親との関わりに関する事例研究

A Case Study of Growth, Development, and Involvement with Father from Birth to Six Months

坂口 将太*

Abstract

This study aimed to investigate the influence of the father's brooding behavior on the father-son relationship during babyhood. The child's growth and development and the father's brooding behavior were examined from the child's birth to six months of age. The findings revealed that the father can build an attachment relationship with the baby early on. However, a reduction in the time devoted to involvement with the baby negatively affected the father-son relationship. Thus, this study revealed the importance of the length of time devoted to involvement with the baby to build the father-son relationship.

キーワード：愛着関係、父子関係、育児行動、子育て、育児参加

I はじめに

近年、日本社会ではライフスタイルの多様化が進み、各家庭に合わせた様々な生活様式が展開されている。1985年に「男女雇用機会均等法」の制定、1999年には「男女雇用機会均等法」の改正および「男女共同参画社会基本法」が制定され、女性の社会進出や男性の家事への参加が社会全体における課題として取り上げられるようになった。一方で、1990年の1.57ショックを受けて、1994年に「エンゼルプラン」を皮切りに、1999年に「新エンゼルプラン」、2004年に「子ども・子育て応援プラン」が打ち出され、それ以降も少子化に歯止めをかけることを目的として、育児に関する環境を整えるための様々な方針や法律が制定されてきた。加えて、厚生労働省(2010)がイクメンプロジェクトを始動させ、働く男性の育児へのより積極的な参画を促している¹⁾。これらのことから、父親の育児への積極的な参画は今後も現代の日本社会における重要な課題と

なることが考えられる。

育児における父親の役割や父親の影響についての研究は、海外において1970年代を契機として推進されるようになったとされている^{2),3)}。小野寺(2014)は、1970年代は「父子関係と遊び」、1980年代・1990年代は「母親のサポート源としての父親」が大きなテーマとして研究が進められ、1990年代後半から2000年代に入ると子育てをする父親自身に焦点をあてた研究が見られるようになったと述べている。いずれの時期の研究においても、父親として子どもと関わることは意味のあるものであり、子どもの発達(性役割の発達、知的発達、社会的適応など)に大きな影響を与えることを示唆している³⁾。加えて、父親の育児参加は子どもの発達だけでなく、母親の育児ストレスを軽減する役割もあることが明らかになっている^{4),5)}。育児行動について、前上里(2004)は、子どもへの養育行動は、性別や本能といったものではなく、経験によってふさわしい行動が育成され、より適切なものへと変化させられる可

* Shota SAKAGUCHI 聖和短期大学 専任講師

1) 厚生労働省(2010) イクメンプロジェクト <https://ikumen-project.mhlw.go.jp/>

2) 高橋種昭・高野陽・小宮山要・大日向雅美・新道幸恵・窪龍子(1994) 父性の発達—新しい家族づくり—. 東京：家政教育社.

3) 小野寺敦子(2014) 親と子の生涯発達心理学. 東京：勁草書房.

4) 森永裕美子(2010) 父の親性(親であること)と母の育児負担感に関する研究. 小児保健研究, 69: 645-656.

5) 田中恵子(2010) 父親の育児家事行動・夫婦満足度の変化と母親の育児ストレスとの関連性. 人間文化研究科年報, 25: 125-134.

能性について言及している⁶⁾。さらに、父母がそれぞれの役割を果たしているというわけではなく、父親も母親のように育児行動することが可能であり、変化しうることを示唆している。また、愛着関係について、Cox et al. (1992) は、12ヶ月時点での乳児との愛着関係形成には両親それぞれの乳児への関わりが影響を与えることを報告している。また、愛着関係の質的な面で父母間に差異は認められないことも報告している⁷⁾。

これらのことから、育児において父親特有の役割や影響が存在している一方で、それによって育児行動が規定されるわけではないと考えられる。特に、乳児期においては、乳児が活動する範囲や内容も非常に限定的であるため、父親は母親と同様に育児行動を取り、それを通して乳児と関係性を構築していくことが可能であると考えられる。しかしながら、育児行動を通しての父親と乳児の関係性の構築過程について出生から縦断的に調査したものは見られない。

そこで本研究では、ある父親とその子を事例的に取り上げ、乳児期初期の発育発達の様子と父親の育児行動が乳児との関係にどのような影響を与えるかについて縦断的に検討することを目的とした。

II 方法

1. 対象者

対象者は、世帯構造が核家族である1家族の中の父親とその子であった。対象者の一人である父親は筆者自身であり、短期大学の保育科に所属する大学教員である。一方、対象児は筆者の第一子で男児である。2019年6月25日に予定帝王切開にて出生した(在胎期間38週4日、身長51 cm、体重3078 g)。

2. 対象期間

対象期間は、対象児が出生した2019年6月25日から2020年1月24日までの7ヶ月間とした(出生～月齢6ヶ月頃までの期間)。

3. 対象児の発育発達および父子の関わりに関する記録について

対象児の発育については、出生時、1ヶ月検診時および4ヶ月検診時に看護師等によって計測されたものに加え、大型商業施設等の授乳室に設置されている身長計および体重計を用いて父母によって計測されたものを検討した。

対象児の発達については、母親が記入した育児日記を基に、どのような行動が見られたかを月齢ごとにまとめた。また、河原(2011)を参考に各月齢で目安となる行動と照らし合わせて検討した⁸⁾。

父親の育児行動および父子間の関わりについては、筆者自身が対象児と関わる中で記録したメモ等を用いて検討した。

III 結果および考察

本研究は、ある家族の父子を事例的に取り上げ、乳児期初期における父親の育児行動が対象児との関係にどのような影響を与えるかについて縦断的に検討することが目的であった。検討していくにあたって、対象児の発育発達と父子の関わりについて月齢1ヶ月単位で検討していくこととした。

1. 対象児の発育について

対象児の身長および体重の推移を表1に示した。6月25日、7月31日および11月13日が、それぞれ出生時、1ヶ月検診および4ヶ月検診の日程であり、その際に看護師等によって計測された。それ以外の9月21日、10月17日および1月19日は、父母によって計測された。

図1には、webサイト(エクセルママ, 2015)で配信されているデータファイルを利用して対象児の身長および体重の発育曲線を示した⁹⁾。網掛けの部分、身長および体重それぞれにおける3~97パーセントイル値の範囲を示している。身長について、出生時は標準的であったが、月齢2ヶ月までは50パーセントイル値を下回っていた。月齢2~3ヶ月頃から50パーセントイル値付近となり、それ以降も50パーセントイル値付近を推移していた。体重について、出生時は標準的であったが、月齢2~3ヶ

6) 前上里泰史(2004) 乳児期の父子関係が乳児の情緒発達に及ぼす影響。児童・家庭相談所紀要, 21: 53-60.

7) Cox, M.J., Owen, M.T., Henderson, V.K., and Margand, N.A. (1992). Prediction of infant-father and infant-mother attachment. *Developmental Psychology*, 28(3): 474.

8) 河原紀子(2011) 0歳~6歳 子どもの発達と保育の本。東京: 学研.

9) エクセルママ(2015) 成長曲線テンプレート. <https://excel-mama.com/childbody-measurement>

表1 対象児の発育推移

日付	身長	体重
6/25 (出生時)	51 cm	3.078 kg
7/31 (1ヶ月検診時)	54.1 cm	4.49 kg
9/21	約60 cm	約6.80 kg
10/17	約62 cm	約7.45 kg
11/13 (4ヶ月検診時)	64.0 cm	8.15 kg
1/19	約68 cm	約8.45 kg

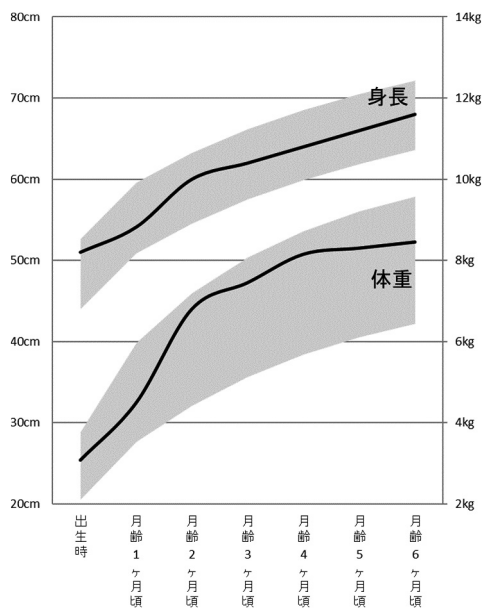


図1 対象者の身長および体重の推移
(エクセルママ (2015) を筆者改変、作図)

月頃には体重が97パーセントイル付近まで増加した。その後も50パーセントイル値を上回る値を推移していた。身長、体重どちらにおいても月齢2～3ヶ月頃に一度急激に増加する傾向が見られた。また、いずれの時期においても3パーセントイル値を下回ることや97パーセントイル値を上回ることにはなかった。これらのことから、本研究の対象児は、通常の発育範囲内に収まっており一般的な発育傾向であったと言える。

2. 出生～月齢1ヶ月未満の様子

表2に出生から月齢1ヶ月未満において見られた対象児の発達を示した。把握反射、吸てつ反射、ルーティング反射およびモロー反射等の原始反射や

生理的微笑といった一般的な新生児に見られる行動が確認された。それだけでなく、入院中において、授乳時に母親が母乳を上手く与えられなかったことに対して不快や不服といった感情を泣かずに表情のみで表していた。一般的に、出生時に持つ感情は「興奮」のみとされており、生後3ヶ月頃から「快・不快」が加わるとされている。しかし、今回の対象児は、出生時点で「快・不快」の感情を理解している様子が見られた。また、新生児期において、他者の顔の動きを模倣する行動が見られるという報告がある¹⁰⁾。しかし、今回の事例では、授乳室から病室に戻ってきた際にベビーコットの中でその表情を表していた。そのため、他者の表情を模倣したというわけではなく、新生児自身が感情に合った表情を見せたと言える。しかしながら、新生児の行動のほとんどは反射で構成されており、出生時点で表情のみを随意的に操作できるとは考えにくい。以上のことを踏まえると、表情は出生時点である程度、感情と紐づけされている可能性が考えられる。いずれにしても、情緒面において、新生児期から個人差が存在しており、感情に合わせた表情を見せることができる可能性が示された。

また、追視について、この時期の乳児は、視界に捉えられる範囲まで追視するとされている⁸⁾が、本研究の対象児は月齢1ヶ月になる直前には、視界から物体が外れても物体が動き切った後に首を動かして追視する行動を見せた。このことから、発達にはかなりの個人差が存在していることが考えられる。

この時期の父親との関わりについて、出生前から両親学級等で育児に関する基礎的な知識を学んでいたこともあり、母親からの直接授乳以外の育児行動を実践できる状態にあった。また、母親の妊娠中から父親の役割や責任について考える時間が増え、父

表2 出生～月齢1ヶ月未満頃までに見られた発達
(2019年6月25日～2019年7月24日)

原始反射が確認できる
生理的微笑が見られる
人の顔や物体を注視する様子が見られる
首を動かして追視する
不快や不服を表情で表す

10) Meltzoff, A.N., and Moore, M.K. (1977) Imitation of facial and manual gestures by human neonates. Science., 198 (4312): 74-78

親としての自覚が芽生えていた。しかしながら、まだ授業期間中であったことや出張等もあったため、母親の育児のサポートや家事を行うことが主であった。そのような中で、少しでも関わりを持てるようにするために、沐浴は父親が担当する形を取って父子間のスキンシップの機会を設けた。しかしながら、この時点では対象児は他者の区別ができていないため、誰が何に対応しても常に同様の反応を見せていた。

3. 月齢1ヶ月頃の様子

月齢1ヶ月頃に見られた対象児の発達について表3に示した。この時期の発達は河原（2011）に記載されている一般的な発達傾向に即した形であった⁸⁾。おそらく、出生時点である程度の発達が見られたことや、出生時から1ヶ月検診時の身長および体重も緩やかな増加であったため、発達も緩やかに進んだと考えられる。

この時期の父子間の関わりについて、夏季休暇に入ったことで育児に費やす時間の割合を増やせるようになった。加えて、母親に産後うつ傾向が見られたことから、本格的に育児に参加する形となった。おむつ替え、沐浴や寝かしつけ等、直接授乳以外の育児行動を母親と協力しながら行った。その際、対象児の様子をよく観察し、対象児がストレスを感じにくい姿勢、動きやタイミングを探して実践していった。例えば、沐浴時の洗う場所の順番や寝かしつけのリズム等を対象児の様子を見ながら試行錯誤し、その時点で最適と考えられるものを採用した。加えて、母親から対象児における各育児行動の留意点やコツといったものを聞き、それを実践する形を採った。それによって、より対象児の状況に合わせた育児行動が実践できるようになった。この変化は、前上里（2004）が示唆していたことを支持する内容であった⁶⁾。これらのことから、途中から育

児に参加する場合においても、対象児をよく観察することやもう一方の養育者がどのような形で育児行動を行っていたかを確認しながら実践していくことで対応可能であることが示された。この期間を通して、対象児が父親の育児行動を徐々に受け入れていく様子を見せていた。

4. 月齢2ヶ月頃の様子

月齢2ヶ月頃に見られた対象児の発達について表4に示した。発達傾向については、前節の月齢1ヶ月頃の様子と同様に一般的な発達傾向に即した姿であった。この時期から、社会的微笑といったような外界からの刺激に対して明確に反応する様子が増えてきた。また、手を口に入れる等の自己刺激運動や手に持った玩具を振ろうとするといった自ら刺激を得るような行動が徐々に見られるようになった。

この時期も依然として夏季休暇中であったため、前節に引き続き育児に積極的に参加する形となっていた。上述したように、刺激への反応や刺激を得ようとする行動が増えてきたことにより、養育者からの声かけやあやしかけに反応してくれるため、対象児の快・不快を非常に読み取りやすくなった。月齢1ヶ月頃までの一方向性のように捉えられがちなコミュニケーションから明確な双方向性のコミュニケーションになったことで、育児行動の手応えがよりはっきりと感じ取れるようになった。そのため、その姿が育児の励みになっていった。また、父親が継続的に育児に参加したことで、母親の育児ストレスを軽減させることに繋がり、月齢2ヶ月になった時点で母親の産後うつが改善された。本研究の中でも、森永（2010）や田中（2010）が報告しているように父親の育児参加によって母親の育児ストレスが軽減されることが認められた形となった^{4),5)}。

対象児との関わりについて、刺激に対する反応が見られるようになったため、名前を呼ぶことやあや

表3 月齢1ヶ月頃に見られた発達
(2019年7月25日～2019年8月24日)

笑顔の頻度が増える
おしゃぶりを握る
クレーンが見られる
うつ伏せにすると顔を上げようとする
刺激のある方向へ寝返りをしようとするが元の姿勢に戻ってしまう

表4 月齢2ヶ月頃に見られた発達
(2019年8月25日～2019年9月24日)

首が座り始める
手を口に入れる
声かけやあやしかけに笑顔を見せる (社会的微笑)
手に持った玩具を振ろうとする
音のする方に顔を向ける
うつ伏せ時に顔を上げられる

しかける回数がかなり増加した。また、音のなる玩具や物に興味を示す姿が見られるようになったことから、それらを介してコミュニケーションを取る機会も増えた。一方で、月齢1ヶ月頃から見られていたクレーイングの頻度や声量が増大したことから、応答的な関わりでの機会も増加した。これらのことから、この時期が父子間での愛着関係形成の初期段階になったと考えられる。

5. 月齢3ヶ月頃の様子

月齢3ヶ月頃に見られた発達について表5に示した。対象児はこの時期に下の前歯が生え始めた。発達については、この時期に入って、多くの面で明確な変化を見せた。月齢2ヶ月頃から外界からの刺激に反応していた姿から月齢3ヶ月頃になると一層反応するようになり、散歩中に周囲の景色や刺激に対して顔を向けるようになった。また、笑顔を浮かべ続けられるようになったり、声を出して笑うようになったりする姿が見られるようになった。加えて、玩具を掴もうとする様子、哺乳瓶での授乳を拒否する様子や喃語を話し始めた様子といったように、対象児が自らの意思で行動を起こす姿が見られるようになった。

また、これまで対象児と一緒に決まった時間に就寝、起床を繰り返してきたことで、この時期に入って昼夜の区別がつくようになり、夜間にまとまって寝ることが増えた。加えて、自らの意思で寝返りができるようになり、うつ伏せの姿勢で眠りにつこうとする姿も見られるようになった。

表5 月齢3ヶ月頃に見られた発達
(2019年9月25日～2019年10月24日)

散歩中、周囲の景色や刺激に対して顔を向けて反応
ニコニコし続ける
声を出して笑う
いつでもうつ伏せから仰向けに戻ることができる (i.e. 寝返り返り)
玩具を掴もうとする
下の前歯(左)が生え始める
寝返りができるようになる(寝返り返りが先にできた)
哺乳瓶での授乳を拒否する
対象を注視しながら追視する
喃語を話し始める
鼻詰まりが見られる
昼夜の区別がつき始める

この時期における父子間の関わりは、夏季休暇が終了し秋学期の授業が始まったことにより、日中に関わる時間が大幅に減少した。また、授業再開に伴う業務量が増加したことで仕事と育児行動とのバランスが崩れた。そのため、この期間を通して、父親に軽度ではあるが産後うつに似た傾向が見られた。しかしながら、対象児と共に入浴する等、可能な範囲で関わる機会を持ち続けた。その結果、帰宅した際に顔を合わすとすぐに笑顔を浮かべたり、泣いている際に抱き上げると落ち着いて泣き止んだり、対象児に愛着の対象の一人として認識されるようになった。

6. 月齢4ヶ月頃の様子

月齢4ヶ月頃に見られた発達について、表6に示した。この時期に4ヶ月検診が行われた。検診時において、首が完全に座っていることが確認された。加えて、自ら首を起こすこともできるようになっていたことが確認された。これにより縦抱きが安定したため、対象児が自らの意思で任意の方向を向くことができるようになった。そのため、ちょっとした音や動き、接触に対して素早くそちらを向くようになった。また、手をよく動かせるようになったため、興味を持った対象に自ら関わろうとする意思表示がかなり明確に見られるようになった。それに付随して、大声を上げて自己主張しようとする姿や声を出して笑う姿、物体を意図して握る姿が増えた。これらに加えて、人見知りが見られ始め、対象児の父母以外が抱くと不安そうな表情を見せた後に泣き

表6 月齢4ヶ月頃に見られた発達
(2019年10月25日～2019年11月24日)

大声を出して自己主張するようになる
五感が鋭くなってきた(ちょっとした音や動きに反応)
人見知りが見られ始める
完全に首が座る
首を起こす
手をよく動かす
両手で物を掴む
物を意図して握る
睡眠リズムが少し崩れる
あやすとよく笑顔になる
声を出して笑う機会が増える
喃語の種類が増える

出す様子が見られた。

父親との関わりにおいては、引き続き授業期間中のため、日中の関わりを持つことは難しかった。一日の中で対象児と関わる時間は、平日で4時間程度、休日でも他大学の運動部のコーチを担っていたことから6時間程度となっていた。一方で、意思表示がかなり明確になったことから、これまでよりもさらに応答的な関わりが増えた。すなわち、関わる時間に変化は無かったが関わり方が大きく変化していった。父と子が一対一で関わる機会は、母親が家事で動き回っている時や入浴時くらいであった。そのため、その際に対象児と遊ぶ形で関わりを持った。それにより、対象児は父親を遊び相手として認識するようになった。加えて、上述したように父親は対象児と関わる機会と時間が少なくなったため、対象児において父親と母親に対する愛着対象の優先順位が見られ始めた。このことから、一対一の場面での乳児に対する役割や関わり方を固定すると、乳児はそれに合わせた認識を持つと考えられる。見方を変えると、父親であっても育児行動の大半を担うことや関わる時間を増やすことで愛着対象としての優先順位が上がる可能性が示された。

7. 月齢5ヶ月頃の様子

月齢5か月頃の発達の様子について、表7に示した。この時期から、離乳食を開始した。発達については、河原(2011)に記載されている内容に即した形であった⁸⁾。足舐めやうつ伏せで腕を伸ばして上体を起こす姿が見られた。また、車のベビーシートに乗せた際に一人で寝ているといったように寝かしつけにかかる時間が減少する傾向が見られた。加えて、音のリズムや発音を少しずつ理解し始めたのか、名前を呼ぶと呼ばれた方を向く機会が増えた。しかしながら、玩具や別の何かに夢中になっている

表7 月齢5ヶ月頃に見られた発達
(2019年11月25日～2019年12月24日)

離乳食開始 (生後166日目)
あやすとはっきりと声を出して笑う
足舐め
名前を理解しつつある
呼ばれた方を向く
車のベビーシートで一人で寝る
下の前歯(右)が生え始める

際は呼び掛けても反応は見られないことが多かった。

この時期の父子間の関わりにおいて興味深かったことは、この時期から関わり方に好みが見られるようになったことである。あやすと大きな声を出して笑うようになってきたが、大きな声で笑うものと笑みを浮かべるだけのものといったように関わり方の違いによって笑い方に変化が見られるようになった。対象児を抱いて大きく動いたり、父親が大きく動いたりするような遊びといった関わりは大きな声を上げるが、対象児の手足を動かすだけの関わりは笑みを浮かべるだけであった。加えて、胴体をくすぐるといったスキンシップは声を出して喜ぶが、顔と顔をくっつけるようなスキンシップは嫌がる素振りを見せた。また、玩具においても優先的に手に取ろうとするものとあまり興味を示さないものが見られた。二本目の歯が生えてきていることもあり、固い物は優先的に手に取って口に持って行こうとする様子が見られた。一方で、柔らかい素材の物については、あまり興味を示さなかった。これらのことから、限られた時間の中で対象児と関わる場合であっても、試行錯誤を繰り返して対象児の好みや特性を理解していくことが関係性を維持していく上で非常に重要であると考えられる。

8. 月齢6ヶ月頃の様子

月齢6ヶ月頃に見られた発達の様子について、表8に示した。月齢6ヶ月頃では、上の前歯が2本同時に生え始めたことで歯ぎしりする姿や離乳食を積極的に食べる姿が見られるようになった。一方で、食物アレルギーの発症も確認された。また、視覚の発達が進んできたことを示すように、視覚を介した発達が多く見られた。例えば、対象物を注視しながら右手から左手に持ち替える行動や約6m離れた距離や鏡越しであやしても笑うといった行動である。加えて、養育者の手の動きを真似しようとする姿や「いないいないばあ」遊びで笑う姿も見られた。手足を随意的に動かせるようになったことと視覚の発達が進んだことで、欲求に対して対象児からベビーサインに似た行動も見られるようになった。抱き上げて欲しい時は手を養育者の方に向けて伸ばしたり、相手をして欲しい時は手を上下に振って机を叩いたりする姿が見られた。

この時期の父子間の関わりについて、月齢3ヶ月

表8 月齢6ヶ月頃に見られた発達
(2019年12月25日～2020年1月24日)

上の前歯が生え始める (2本同時)
発熱
抱っこやご飯などの要求を手足を動かして示すようになった ずり這い (後方に進む)
歯軋り
離乳食を積極的に食べる
夜しっかり寝る
夜泣きが始まる
物を持ち替える
動きを真似しようとする
いないいないばあで笑う
分離不安が見られ始める
自らうつ伏せになって寝る
離れた距離からや鏡越しであやしても笑う (6m前後)
食物アレルギー発症

頃から日中の関わりが減ったことが続き、その間は母親が常に関わってきたことから明確な愛着の優先順位が形成された。母親が愛着対象としての優先順位第一位となったため、母親が見えなくなると分離不安を起こし泣き出す姿が見られた。その場合、父親が対応して抱き上げてほとんど泣き止まなかった。それだけでなく、父親が関わった際、父親に対して興味を示す仕草や時間が減少した様子が見られた。その背景には、父親が月齢3～4ヶ月頃から平日4時間程度、休日6時間程度しか関わっていないことも要因として挙げられる。対象児にとって、母親と父親における愛着対象の優先順位が明確になっただけでなく、関わる時間が少なかったことから愛着の対象としての認識も薄れた可能性も考えられる。母親と父親が一緒にいる場合においても、対象児は母親に対して積極的に関わろうとし、母親の方へ向かう傾向が見られた。この結果は、父親と母親で乳児との愛着関係の質に差異は無いことを示唆していたCox et al. (1992) の報告とは異なる知見を提示するものとなった⁷⁾。つまり、愛着の形成過程においては、関わる機会や時間に変化が起きると愛着の対象としての認識も変化を起こす可能性が示された。もちろん、母親との愛着関係がより強固なものとなったことから来る相対的な優先順位の変化による影響も多分に存在していると考えられるため、今後、父親が関わる機会や時間を増加させることによって対象児の行動がどのように変化する

か検討する必要がある。

IV まとめ

本研究の目的は、ある父子を事例的に取り上げ、父親の育児行動が対象児との関係にどのような影響を与えるかについて縦断的に検討することが目的であった。出生から月齢6ヶ月頃までの対象児の発育発達と父親の関わりを1ヶ月単位で検討した。

事例の中で、父親の育児行動は育児支援者的な行動から本格的な育児参加へと変化していった。それに伴い、対象児と関わる機会や時間も増加していった。本事例において、父親は直接授乳以外の育児行動は一通りできる状況にあった。そのため、母親と協力して育児を行い、母親の育児における負担を減らすことができた。加えて、父親が主体的に育児行動を行ったことで対象児は月齢2ヶ月頃から父親を愛着の対象として認識していく様子が見られた。これらのことから、父親の積極的な参加は、子どもにとっての愛着の対象を増やし、より安定的な養育環境の構築につながると考えられる。

しかしながら、本研究は大学教員として勤務する筆者自身が父親として対象児と関わった一つの事例である。就業形態の観点から時間的に余裕ができる時期や業務量への配慮があったため、育児行動全般を担う機会を作ることができた。その後、通常の業務量に戻りつつあった際に仕事と育児のバランスが崩れ、産後うつに似た傾向が現れた。このように、今回の事例において、筆者自身が就労と育児を両立させることの難しさを身をもって学ぶこととなった。一方で、他の業種や就業形態においては両立がさらに難しくなることも考えられる。特に、近年では共働き世帯も増えてきていることから、育児の基盤となる父母が協力して家庭内での育児行動の分担はもとより、負担割合をその都度流動的に変化させていくことが重要であると考えられる。加えて、昨今、社会的課題としても挙がる職場内での就労と育児のバランスを調整できるような環境の整備も今後さらに求められるようになるだろう。

また、本事例の後半にかけて、対象児と関わる機会や時間が減少していた。その影響で、相対的に母親と対象児の関わる時間の割合が増加した。その結果、愛着対象としての優先順位が明確化した。もちろん、それ以前から母親による直接授乳等の育児行動やスキンシップの内容、頻度が異なっていたた

め、母親が愛着対象の優先順位第一位になることは当然のことである。しかしながら、それだけでは説明できない父親に対して興味が薄れた様子が見られたことから、関わる機会や時間が減少したことで愛着の対象としての認識が薄れた可能性が示された。つまり、愛着の形成過程においては、関わる機会や時間の変化によって愛着の対象としての認識も変化することが考えられる。本研究では、愛着の対象としての認識が薄れた事例となったが、反対に愛着の対象としての認識が強まるケースも考えられる。そのため、今後の課題として関わる機会や時間を増加させた際に対象児の認識が変化し、仕草や行動が変化するのにかについて継続的に検討していく必要がある。

以上のことから、本研究では育児に積極的に参加していくことで父親も早い段階から愛着の対象として認識される一方で、出生から月齢6ヶ月までの期間においては、関わる機会や時間が変化することで父子間の関係性が変化する可能性が示された。加えて、乳児期において、父親が可能な限り機会と時間を持って育児行動を担うことで母親の育児負担を軽減することや安定した養育環境の構築に寄与することが考えられる。

最後に、今回検討した内容はあくまで一事例であり、一般化することは難しい。しかしながら、今後、育児に関する研究において本事例を含めた様々な背景の事例を集約し多角的に検討していくことで、様々な育児様式に対応した知見が得られると考えられる。また、本研究がその一端となれば幸いである。

参考文献

- Cox, M.J., Owen, M.T., Henderson, V.K., and Margand, N. A. (1992). Prediction of infant-father and infant-mother attachment. *Developmental Psychology*, 28(3): 474.
- エクセルママ (2015) 成長曲線テンプレート.
<https://excel-mama.com/childbody-measurement>
 (サイト確認日2020年2月10日)
- 厚生労働省 (2010) イクメンプロジェクト.
<https://ikumen-project.mhlw.go.jp/>
 (サイト確認日2020年2月5日)
- Meltzoff, A.N., and Moore, M.K. (1977) Imitation of facial and manual gestures by human neonates. *Science*, 198 (4312): 74-78.
- 河原紀子 (2011) 0歳～6歳 子どもの発達と保育の本. 東京: 学研.

- 前上里泰史 (2004) 乳児期の父子関係が乳児の情緒発達に及ぼす影響. *児童・家庭相談所紀要*, 21: 53-60.
- 森永裕美子 (2010) 父の親性(親であること)と母の育児負担感に関する研究. *小児保健研究*, 69: 645-656.
- 小野寺敦子 (2014) 親と子の生涯発達心理学. 東京: 勁草書房.
- 高橋種昭・高野陽・小宮山要・大日向雅美・新道幸恵・窪龍子 (1994) 父性の発達—新しい家族づくり—. 東京: 家政教育社.
- 田中恵子 (2010) 父親の育児家事行動・夫婦満足度の変化と母親の育児ストレスとの関連性. *人間文化研究科年報*, 25: 125-134.